

千葉縣道路愛護會之現狀

千葉縣土木課

本縣は神奈川縣と相對して東京灣を扼し、國防上最も重要な地位を占め他面東京市の厨房を以て任じ、其の豊富なる海産農産及林産物は、陸路僅々數十分乃至數時間にして東部市場に達する頗る恵まれたる地勢にして、而も風光明媚なる名勝舊跡隨所に求め得べく鐵道は官線私線とも縱横に發達し、大小の道路網は其の名の示す網の目の如く四通八達す、其の主たる幹線は悉く定期バスを通す。最近統計の示す所に依れば道路の延長は、

國道及特殊國道	六四 ^町
府 縣 道	二、九一三
市 町 村 道	一八、九九五
計	二一、九七二

即ち通計約五千五百里に達する莫大なる道路延長を有す。

前述の如く帝都に近接せるため、車輛特に自動車交通の激甚なること驚くべきものあるに反し、其の土質は概ね不良にして、海

岸線に沿へる地方に砂地を有せると、房總境界附近の山岳地々方に僅に軟膏層を有する以外的一般中部及北部方面は悉く脆弱性の腐蝕土と粘質土とを以て覆はれ爲めに、冬季霜雪融解時に在りては車輛は、元より徒歩者すら通行難澁の區間府縣道中に於ても絶無に非らず而も之れが路面築造維持に要する砂利碎石は、僅に南部の一、二郡に互りて少量の産出を見るのみ、其の中部北部の大部分に在りては一粒の砂利一片の碎石をも産出せず、所要量の悉くを多額の運搬賃を負擔して、遠く縣外よりの輸入に仰がざるべからず、隨て其の價額は驚くべき高價に達す是れがため市町村道の如き到底意の如く使用を許さざるは當然にして、縣と雖も充分なる所要を満たすことを得ず、爲に縣道路線中砂利數未完了のもの相當延長に及ぶ亦已むを得ざる歸結とす、今縣が年々投ぜる道路橋梁修繕費の最近五年間を掲記すれば左の如し。

年 次 道路修繕費 橋梁修繕費 道路工夫給 計

昭和十年度	三九、二四・〇六	三、六五・四二	二六、六二・五〇	五七、三四・九八
十一年度	三九、四六・五〇	三、四六・四七	二六、四二・四八	五〇、〇〇・四五
十二年度	三六、二五・八〇	二、四五・〇八	二六、五九・七三	五九、〇〇・六一
十三年度	三六、八三・〇〇	三、六六・〇〇	二六、八七・〇〇	五九、七〇・〇〇
十四年度	三六、七〇・六一	三、五九・六六	二六、八〇・〇〇	五九、七〇・〇〇
平均	三六、七〇・六一	三、五九・六六	二六、八〇・〇〇	五九、七〇・〇〇

備考 本表中十二年度より十五年度までは決算額を十六年度分は豫算額を示す尙昭和十七年度決議豫算總額は五七〇、

千葉縣道路愛護會調

土木出張所名	團體數	會員數	會長
千 葉	二二二	七、二〇一	大部分町村長
松 戸	三一	二一、一一七	青年團長、町村長
佐 倉	三一	九、一八七	右 同
佐 原	三六	九、一四一	右 同
銚 子	二〇	五、五四五	大部分青年團長
八日市場	二二	三、九三四	右 同
東 金	三一	一三、九二五	町 村 長
茂 原	二六	七、〇四四	大部分青年團長

摘 要

每戸一人宛を以て組織せるもの多し
 青年團を以てせるものと世帯主を會員とせるもの相半す
 右 同
 右 同
 青年團員を以て結成せるもの多し
 右 同
 一般町村民を以て組成せるもの多し
 青年團員を以て組成せるもの過半とす

九七九圓にして本表平均額に對し約七分二厘の増加とす。
 縣は前述の狀態を脱却すべく、最近十數年來歴代當局相次で之れが克服に努め來れる結果當時に比し、其の面目を一新したるものありと雖も尙且つ斯の如し、往年惡路の代表縣として名譽ならざる批評を甘受せざるを得ざりし所以また實に此の點に存す。
 是等の事態は因となり果となり、縣民一般に道路に深き關心を持ち冬季雨後も、尙車輛を通し得る道路を求むるの念甚だ熾烈なるものあり此の機運の結實せるもの即ち市町村道路愛護會とす。
 本縣道路愛護會は昭和十年一月以降縣の誘導に依り、順次組成せられ現在左表の如き狀況にあり。

八幡	二六	一〇、七八二	町村長	一般町村民を以て組成す
大原	一三	一一、二六二	町村長	一般町村民を以て組成す
大多喜	八	四、二一五	右同	
木更津	三七	二〇、二二五	町村長、團體長	一般町村民と各種團體を以て組織せるもの相半とす
館山	二八	一四、三〇六	右同	
鴨川	二四	五、九〇二	大部分町村長	一般町村民を以て組成す
計	三五五	一四三、七八六		

以上團體結成以來縣は農閑季を利用し、各地方毎に講習會を開き或は道路愛護鼓吹の映畫會を催す等専ら地方民をして、道路の使命を正視せしめ兼て實地に於て、作業の順序を指導演説する等之れが育成に努め、會員もまた會で惡路の苦難に惱める反動として最も着實に作業奉仕に隨ひ、順次効果を揚げ來れり殊に昭和十二年夏支那事變勃發後は、單なる路面修補作業等の實利主義のみを主目標とせず専ら國民精神緊張運動と關聯せしめ、日を定めて縣下一齊出動を實施す。團員も縣の此の熱意に共鳴當日は會員以外の一一般市町村民男女學生兒童等擧りて之れに參加し、縣下の隅々まで到る處全く道路愛護日たるの實況を呈し、昭和十四年七月七日支那事變記念日を期して、實施せられたる際の如き其の出動人員總數實に十二萬五千三百九十四人を算ふる熱狂的情勢を示し、大なる効果を奏せり。

爾來事變は全く長期戦となり、物資勞力兩ながら漸次窮乏を告

ぐる事態に至りたるを以て、之れ等一齊出動の如き積極的活躍を休止團體各個の任意的作業に委せたるも、依然活動的にして四年餘に互る支那事變の如き毫も影響を感ぜず、反つて縣の施工せる附近の道路工事、其他に協力を寄するもの等強烈なる熱意を有するもの少なしとせざるは、筆者等道路行政に關係あるもの、甚だ意を強うする所とす。殊に事變は更に進展して大東亞戰となり物資の窮乏一層深刻を加ふる情勢と共に、銃後の發奮もまた之れと比例して旺盛となり、最近職員に統率せられたる學生生徒の團體にして、出動奉仕するもの漸次活潑となり來れる傾向あるは單に道路の清掃凹凸埋均し等、直面せる利益のみならず將來の中堅層たるべき青少年に道路修補の技術的關心を與ふると、奉仕的風習馴致の萌芽として甚だ悦ぶべき現象なりとす。

而して本縣に於ては、從來道路愛護獎勵規程により毎年一回紀元節の佳辰を卜し、道路愛護會を各土木出張所管内二、三團體宛

選拔表彰するの恒例を有し、本年も去る二月十一日別表の如く表彰せり。表中甲は當日縣廳に代表者を招致し知事より金一封を添へて表彰状を手交せられ、乙は同日所轄出木出張所に店頭等しく

表彰状と金一封を授與せらる。是れ縣下三百有餘の團體が孰れも至大の名譽として競ふて其の選に入らんとことを望む實情にあり。今被表彰各團體既往一ヶ年間の成績概要を表示すれば、左の如し。

昭和十六年道路愛護會成績表

出張所名	作		市町村道	計	作業回数	出動延人員	備考
	團體名	業					
千葉	檜橋村道路愛護會	國府縣道	二・三 <small>軒</small>	六〇・四 <small>軒</small>	七二	二、八三〇	甲表彰
"	生濱町	"	四・三	二九・五	五二	二、三一〇	乙
松戸	船橋市	"	四二・〇	六〇・〇	七七	一〇、七〇五	甲
"	鎌ヶ谷村	"	七・〇	一三・〇	一七五	一一、二五〇	"
"	野田町	"	四五・〇	一一五・〇	一二	一一、一〇〇	乙
"	南行徳町	"	九・〇	一七・〇	二四	一、二八〇	"
佐倉	富里村	"	五・〇	二〇・〇	一四	六、〇〇〇	甲
"	宗像村	"	七・七	一三・六	一七	一三、六六〇	"
"	六合村	"	一八・〇	一八・〇	二九	二、八六六	乙
"	千代田村北部	"	五・〇	一五・〇	一三	三五〇	"
原	山倉村新里	"	二二・〇	三七・〇	一五	一、三〇一	甲表彰
"	豊浦村	"	三四・一	三五・四	一四	二、三六〇	"
"	神里村	"	三六・八	四七・八	五七	三、五〇四	乙
"	良文村	"	四〇・四	五二・四	一五	二、五三四	"

説 苑

銚子	三川村	二・五	二・五	五・〇	一八	三、五〇〇	甲
"	豊岡村	四・四	二三・七	二八・一	二七	二、二五〇	乙
"	東城村	六・三	六・五	一一・八	一四	二、〇一〇	"
八日市場	東陽村	五・〇	六・二	一一・二	二二	二、一五〇	甲
"	阪邊村	一・〇	六・五	七・五	八	四六〇	乙
東金	二川村	一・〇	七六・九	七七・九	一〇	一四、八二〇	甲
"	片貝町	九・〇	四五・七	五四・七	六	五、六七六	乙
茂原	水上村	二八・八	七五・三	一〇四・一	一二	三、八九七	甲
"	茂原町	三六・六	八二・五	二九・一	九	四、六〇〇	乙
"	西村	三二・四	六七・八	一〇〇・〇	九	一、七三〇	"
"	土陸村	五・一	四九・六	六四・七	八	二、四二〇	"
八幡	高瀧村	三五・九	二九・三	六五・二	一七	二、四三八	甲
"	富山村	一六・六	二・一	一八・七	一六	三、七七〇	"
"	里見村	一五・六	二五・九	四一・五	一六	二、四三五	乙
"	内田村	二〇・八	一三・一	三三・九	二四	一、五七六	"
大原	中根村	二〇・〇	一一〇・〇	一四〇・〇	一〇	五、五二〇	甲
"	大原町	一・九	五〇・〇	五一・九	二四	八、六六〇	乙
大多喜	千町村	七・五	三三・〇	四〇・五	五〇	二、八〇〇	甲
"	中川村	一八・四	二九・二	四七・六	三〇	三、二〇〇	乙
"	飯野村	四五・五	九八・〇	一四三・五	一六六	六、九八八	甲
木更津	中郷村	二六・二	一〇〇・四	一二六・六	三三	六、四六〇	甲

青堀村	三七・六	二八・四	六六・〇	一二	五、六一六	乙
周西村	九・二	一〇・六	一九・八	二四	七、八〇〇	乙
平岡村	一〇・七	二四・一	三四・八	一一四	三、三一六	乙
佐久間村	一四・一	—	一四・一	五九	二、〇三一	甲
平群村	六・八	—	一九・一	八	二、五五四	乙
白濱町	—	七・二	七・二	一八	一、四五〇	甲
曾呂村	一二・〇	八・〇	二〇・〇	一五	三、一九三	乙
主基村	—	二八・四	二八・四	三八	三、二五五	乙
田原村	三・五	一八・五	二二・〇	四二	七、一四八	乙

若葉吟社詠草

永き日の視野まだ暮れず文に倦く
磯に佇つ海女の濡れ髪東風晴れて
水草生ふや日毎蒼める龜の池
春曉や代々木の木立静もれる
窓の陽に蠅のそくさと日永かな
牛鳴くや水草生ふる出島晴れ
靄の中に行く手の山や春の朝

如水 如 同 鳥 同 静 風 同 同

春曉を眞帆晴れてけり瀬戸の海
松を抽いて不二大いなり歸る雁
不二ヶ嶺を宿して春の水邊草
風晴れや日永隣の普請聲
春の朝愛馬召さるゝ雨となり
春曉を梢明るし小鳥啼く
晴れ續く俘虜收容所日永なる
春曉や飛機編隊の陽をうけて

落 同 同 浅 同 同 野狐禪 同